

# 中国人学習者における日本語無標可能表現の習得に関する研究

## —この役はあの新人俳優にはつとまらない—

王 怡韓

### 一、研究動機と目的

「今の時間はタクシーが少ないから、なかなかつかまらない」という文は中国語に訳すと「现在这个时间出租车很少，怎么也叫不到」になる。中国語では可能補語による表現「叫不到」を使い、日本語では可能表現ではなく、自動詞「つかまる」の否定形で表現する。母語の影響によって、中国人日本語学習者は「つかまれない」という表現を使う傾向がある。日本語で「可能」を表す「(ラ)レル」や「コトガデキル」などの表現形式のほかにも自動詞で表す場合もある。それに対して、中国語の可能表現には能願動詞「能・可以・会」や「動詞+得・不+方向補語・結果補語」のような可能補語による表現形式もある。日中両言語の可能表現形式が対応していないため、中国人学習者が日本語の可能表現を学習する際に、間違いやすいとよく言われている。筆者が日本語の可能表現形式の学習意識について調査したところ、「とても難しい」と「まあまあ難しい」と答えた人は全体の 83%であり、日本語の可能表現形式の繁雑さが学習者を悩ます存在であることが分かった。<sup>1</sup>

本研究は中国人日本語上級学習者における「無標識可能表現」(以下「無標可能表現」とする)の使用実態について調査したものである。また、可能動詞、可能の助動詞「(ラ)レル」による可能形、および「コトガデキル」のような可能表現も視野に入れ、母語と違う表現に対して中国人学習者と日本語母語話者との使用傾向を比較する。中国人学習者が使用する教科書で区別しなかった表現や勉強しなかった表現に対して、違う学習状況に置かれる中国人上級学習者の使用状況を明らかにしたい。

### 二、先行研究

可能形と自他動詞との関連について、長友(1997)はその動詞は「可能形が<造れる>からといって、いつも<使える>わけではない」と指摘し、「主語が意志をもたな

---

<sup>1</sup>本稿のアンケートで被験者の学習意識に関する質問があった。「日本語の可能表現形式は難しいと思いますか」という質問に対する学習者の選択率が「とても難しい」18%、「まあまあ難しい」65%、「あまり難しくない」16%、「ぜんぜん難しくない」1%であり、可能表現形式の難しさが目立っている。

い無生物で状態性が強調される場合には使えない」と主張した。

張（1998）は有対自動詞は日本語の「結果可能表現」の主な表現形式であり、中国語では可能表現で表すものが、日本語では自動詞で表す。標識を用いていないという特徴から、このタイプの可能表現は無標識の可能表現と呼ぶことができると述べている。また中国語の可能表現はいずれも標識のある表現で、日本語学習者には誤用が起りやすいと指摘している。

姚（2006）は無標可能文の成立条件を二点にまとめた。①意味的条件として対象物の状態変化を引き起こす動作主の存在が想定される。②語用的条件は対象物の状態変化の実現は動作主にとって意図していることでなければならない。

呂（2007）は無意志自動詞は「無標識の可能表現」と見なし、有対自動詞表現が主流であり、動作主の意図が潜在する結果可能表現であると述べている。また、無意志自動詞自体は可能を含意できることから、「(ラ)レル」「コトガデキル」とは共起しにくいと指摘した。しかし、この規則はすべての無意志自動詞に通用するわけではなく、どのような外的条件が必要になるかについて論述されていない。

表1 可能の意味的タイプの分類

意味的タイプ	内容	動詞の性質	意志性	日中両言語の関係
能力	人や動物の潜在的能力	動作動詞/変化動詞/対象変化動詞	あり	対応
属性	主語＝動作対象	動作動詞/対象変化動詞	あり	対応
	主語＝動作擬似主体①属性主が人工的に造られた「道具」	動作動詞/対象変化動詞	あり	対応
	主語＝動作擬似主体②属性主が自然界のもの	変化動詞/対象変化動詞	なし	中－可能形式/ 日－単純動詞
条件	物理、化学、社会、文化、心理的などの条件	動作動詞/変化動詞/対象変化動詞	あり	対応
		変化動詞/対象変化動詞	なし	中－可能形式/ 日－単純動詞
結果	人や動物などが目標に向かって努力することを前提に物事の結果	変化動詞/対象変化動詞	なし	中－可能形式 日－単純動詞

可能の意味分類に関する研究は多く、森田（1979）、寺村（1982）、金子（1986）、渋谷（1993）、張（1998）、張（2001）などが挙げられる。表1は張（2001）を整理したものである。論文では可能表現の意味的タイプを「能力可能・属性可能・条件可能・結果可能」と四つに分類した。また、同論文では、日本語の動詞を「動作動詞、変化動詞、対象変化動詞」の三つに分類し、動作動詞の使う文では、動作主の意志性が含まれている。それに対して、属性可能文では、主語が自然界の物の時、物の変化が物自身の状態変化である。そのため、人間の意志性と関係ない。しかし、中国語では、可能形式が使われ、日本語と対応しないのである。

### 三. 本稿における可能表現の定義

管見の限り、国語学や日本語教育学に関する事典及び先行研究において「可能」の表現に用いる言葉に関する内容にはどれも自動詞による無標可能表現には言及していない。辞書（「参考辞典」をご参照されたい）でも扱っていない内容であるため、日本語教科書で提示しないことも理解できると考える。しかし、日本語教育の観点では実際日本人が使用しているそれらの表現を学習者に教える必要があると考えられる。

本稿で扱う可能表現の定義は以下のとおりである

i 「読める」のような五段動詞に由来する動詞を「可能動詞」とする。

ii 「未然形＋（ラ）レル」を「（ラ）レル形」とする。

iii 可能の意味を表す自動詞を「無標可能表現」とする。

i、ii、iiiを含む全体を「可能表現形式」と呼び、「コトガデキル」もこれに属すると考える。また、自動詞による「無標可能表現」と対照に「コトガデキル」など「可能の標識」を使う表現を「有標可能表現」とする。

### 四. 調査対象及び問題作成

アンケート調査は2010年9月に行った。日中両言語を対照的に分析するため、被験者を日本語母語話者と中国人日本語学習者と二つのグループに分けて調査した。日本語母語話者（JN）78名で、全員が首都圏出身の標準語話者である。学習者の置かれている学習環境を考慮し、さらに分類した。

- ① 日本国内大学に在籍する中国人留学生（CU）52名：T大学、S大学の学部及び大学院に在籍し、全員日本語能力試験1級或いは2級合格者である。そのうち、来日3年未満の学生は17人、3～6年のは23人、6年以上のは12人である。
- ② 日本国内の日本語学校に在籍する中国語母語話者（CJ）50名：A日本語学校上

級クラスの学生で、日本語能力試験1級合格者であり、46人が来日一年未満である。

- ③ 中国国内の大学日本語学科に在籍する大学生 (CN) 37名：S大学日本語学科の四年生で、日本語能力試験1級合格者である。

調査アンケート「第一部 フェイスシート」、「第二部 調査①」及び「第三部 調査②」の三つの部分から成る。そのうち、「第二部 調査①」は「可能表現形式」に関する選択問題20問と日本語能力及び使用教科書についての質問である。選択問題に「コトがデキル」、「(ラ) レル」、「無標可能表現」の三つの可能表現形式が含まれ、全て自他動詞ペアで出現し、そのうち、誤用も含まれる。被験者に普段使用している表現を選択してもらい形式を取り、複数回答の場合もある。また、自他動詞の出現順番は一定ではないのである。例：「車のエンジンは寒いところで\_\_\_\_\_。①かけることができない②かかることができない③かけない④かからない⑤かかれぬ⑥かけられない」全20問は四つの可能の意味的タイプに分かれている。「第三部 調査②」は可能表現及び自他動詞の学習意識などについての調査である。尚、アンケートの第一部は日本語母語話者と中国人学習者両方にやってもらい、第二部と第三部に中国国内にいる学習者専用、日本にいる留学生専用、日本語学習者専用の質問項目が設けられている。

また、語彙の選択は張 (1998) 張 (2001) 呂 (2007) 姚 (2008) を参照した。それぞれ四つの可能の意味的タイプに属し、能力可能2問、属性可能3問、結果可能5問、条件可能10問である。可能の意味的タイプごとの設問を信頼性分析を行ったところ、能力可能文に属する2つの問題の $\alpha = 0.493$  ( $\alpha > 0.4$ ) であり、同じ意味的タイプに属する方向性がある。また、属性可能文の設問の $\alpha = 0.825$  ( $\alpha > 0.7$ ) のため、信頼性が高いと考えられる。五つの結果可能文を信頼性分析によって $\alpha = 0.782$  ( $\alpha > 0.7$ ) であり、五つの文が同じ意味的タイプに属する信頼性が高い。一番設問数の多い条件可能に関して $\alpha = 0.902$  ( $\alpha > 0.7$ ) のため、信頼性が高い。以上の検定により、本研究における四つの意味的タイプの分類すべてに統計的な信頼性がある。

## 五. 調査の結果

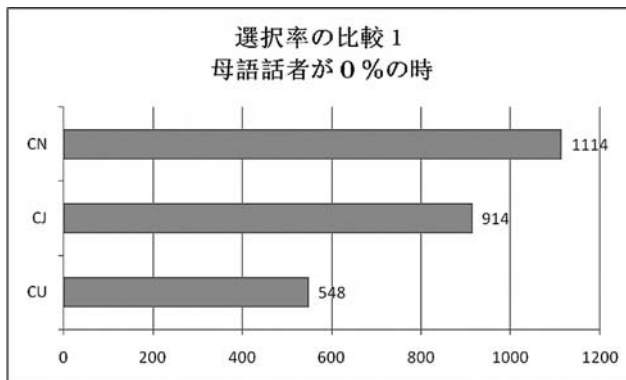
### 1. 各グループの自他動詞および可能表現形式選択の違い

本稿に扱う可能表現形式を分析する前に、まずそれと関係する自他動詞の使用状況を分析する必要があると感じる。全20問の設問文を意味条件及び中国語と対比しながら調査した結果、学習者の選択では人間の介入がない文に関して、自動詞による表

現が好まれることが明らかになった。また、人間の介入があるが、動作が背景化される場合、自動詞と他動詞の両方が選択される可能性がある。学習者の母語である中国語では、意図的動詞が使用され、目的語を取るとき、他動詞による表現がより好まれる。それに対して、非意図的動詞が使用され、文に目的語を取らないときに、自動詞による表現のほうが多く選ばれる。人間の動作性が背景ではなく、前面に現れている時、無標可能表現より、他の可能表現形式のほうが適切である。その中に動作性が高いときに「(ラ)レル」による表現がより多く選択されることが明らかになった。

また、母語話者の選択率が0%の選択肢があるのに対し、それらの選択肢を選ぶ学習者がかなり存在することも興味深い。母語話者が選ばなかった項目に関して、学習者グループの選択率を合計し、資料1「アンケートにおける日本語母語話者が誤用と見なす項目」に示す。三つの学習者グループのうち、母語話者の選択率が0%である項目について、選択率が一番高いのはCNである。また、一番低い選択率を見せた学習者グループはCUであり、選択傾向が三つのグループの中で一番母語話者寄りであることが明らかになった。しかも、CNは他の二グループとの間に著しい差が見られた。母語環境にいる学生と比べ、留学生はより母語話者らしい表現を使用していると思われる。

図1 選択率の比較1—母語話者が0%の時（横軸が人数である）



## 2. 無標可能表現文の使用傾向

無標可能表現の使用傾向として、母語話者と学習者の間に大きな差があることが明らかになった。無標可能表現の使用は文の意味とかかわることを先行研究で指摘された。よって、本稿では四つの可能の意味的タイプを「A. 属性可能、B. 能力可能、C. 結果可能、D. 条件可能」とし、その観点から分析する。

### A. 属性可能文

属性可能に関しては、日本語の場合は自動詞による無標可能表現で表すのに対して、

中国語は有標可能表現を使う。学習者グループのうち、CUの選択率がCN、CJと差が大きいことが分かる。また、同じ属性可能文とは言え、対象者によって選択傾向も違うことが明らかになった。例えば、設問1「水と油はよく\_\_\_\_。①まぜることができない②まざるができない③まざらない④まぜられない⑤まざれない⑥まぜられない」では対象主が自然界の物「水」と「油」であり、人間からの外力がなくても「まざらない」性質である。それに対して、設問10「車のエンジンは寒いところで\_\_\_\_。①かけることができない②かかることができない③かけない④かからない⑤かかれぬ⑥かけられない」は物の属性とはいえ、対象主が人間の作った道具であり。属性を表す一方、背景には人間の動作が絡んでいる。被験者が人間の意志的動作を感じ、そのまま母語である中国語で日本語の文を考え、有標可能表現を使ったと推測できよう。そこで長年日本にいる学習者グループCUは日々日本語環境で蓄積した知識でより日本語母語話者に近い判断をしたと考える。しかし、二つの設問を対比したところ、選択率と属性の違いとの関連性が低いことが明らかになった。

設問1	③まざらない	JN 93%	CU 38%	CJ 24%	CN 16%
設問10	④かからない	JN 90%	CU 42%	CJ 10%	CN 11%

学習者グループのうち、来日して一年未満のCJグループと中国にいる学習者CNグループの選択率に有意差がなく、選択率が大体同じであると言える。また、来日年数の長いCUグループとの間に有意差が見られ、使用傾向に差がある。よって、学習者による属性可能文の使用に関して、来日年数の長いほうがより正確に使用できる一方、まだまだ母語話者の使用と差がある。

## B. 能力可能文

能力可能文は設問2と設問7のみである。設問2「一般的に男性は女性のような高い声は\_\_\_\_。①でることができない②だすことができない③ださない④でない⑤だせない⑥でられない」の学習者グループと母語話者グループの選択率の差が属性可能文の時ほど激しくなかった。人の能力とは言え、自然界の物と見なし、「男性が高い声を出すことができない」と理解する時自動詞による表現を使う。無標可能表現「④でない」を選ぶ母語話者が39%で、学習者の選択率はそれぞれCN0%、CJ6%、CU16%であり。ともに低いである。また、設問7「この役はあの新人俳優には\_\_\_\_。①つとめることができない②つとまるることができない③つとめない④つとまらない⑤つとめられない⑥つとまれない」では、③を選ぶ母語話者がいなく、④の選択率が96%に達した。それに対して、学習者グループの選択率はそれぞれCN8%、CJ12%、CU32%である。長年日本にいるCUグループはより母語話者寄りの使用傾向を見せる一方、まだまだ差が

あることが分かった。

設問 2	④でない	JN 39%	CU 16%	CJ 6%	CN 0%
設問 7	④つとまらない	JN 96%	CU 32%	CJ 12%	CN 8%

### C. 結果可能文

張 (2001) では、文の意味によって人間の動作が背景化され、前景には動作による状態変化しか表されていないと述べている。また、その状態変化が人間動作の意図でもある。四つの可能の意味的タイプの中で唯一日中両言語の間でまったく対応しないのは「結果可能文」である。よって、結果可能表現に関して学習者の産出は母語話者と差が大きいことを予測したが、今回調査の結果から結果可能表現の選択率が他の可能の意味的タイプと比べてそれほど大きな差がみられなかった。

設問 18 「彼のくれた指輪、家中を探してもなかなか\_\_\_\_。①みつかることができない ②みつかることができない ③みつけない④みつからない ⑤みつけれない ⑥みつけれない」に関して各グループの選択率はほかの意味的タイプ文の差ほど大きくないことが明らかになった。それに対して⑤の選択率も高く、それぞれ J N 33%、CU36%、C J32%、CN22%である。動作性が「(ラ) レル形」表現の高い選択率の原因であると考えられる。

また、設問 9 「ブレーキをかけても車は\_\_\_\_。①とめることができない ②とまるることができない ③とまらない④とめない ⑤とまれない ⑥とめられない」のように中国語でも自動詞を用いる文に関して、日本語の文を産出する際に、より自動詞を多用する傾向が見られた。よって、学習者の産出が意味的タイプより母語からの影響がより強いと推測する。

設問 9	③とまらない	JN 67%	CU 60%	CJ 50%	CN 41%
設問 18	④みつからない	JN 95%	CU 60%	CJ 44%	CN 41%

### D. 条件可能文

本調査で一番設問数の多い条件可能について分析したところ、動作主である人間の動作が人間の体の一部に作用し、状態変化を起こした場合に中国語では状態変化より人間の行為が強調されることが明らかになった。学習者が日本語で表現する時、無標自動詞による可能文より「(ラ) レル形」が好まれる。また、三つの学習者グループのうちCNとC Jの傾向が似ており、CUとの差が大きい。しかし、それは全ての項目ではなかった。

全体傾向から、CNグループとC Jグループの選択傾向が似ており、CUグループとの差が大きい。CUグループの選択傾向は学習者グループで最もJ Nグループと類



似しているが、それでも有意差が見られた。全体の傾向として、CNとCJ、CUとJNの傾向が似ている。しかし、CJの選択率の変化が激しく、一番不安定である。その原因は来日してから年数が短く、中国国内でいつも使っていた日本語が日本語環境からの影響を受け始めている。その結果、混乱が起こり、時々過剰な誤用文を産出する。 possible 的意味のタイプより、動作性の有無が選択率を左右すると考えられる。

分析の結果から、三つの学習者グループ間の選択傾向に一定の特徴があることが明らかになった。しかし、同じ母語を有する学習者にとって母語の影響以外に他の原因も考えられる。長年日本にいる学習者グループCUの選択傾向が母語話者グループJNと似ていることから、来日年数が一つの原因であると推測される。学習者139人による無標可能表現の選択数と来日年数の相関をSPSS for Windows 15.0Jを用いてデータを数量化し検定した結果、相関係数が0.333であり、有意水準が1%の時点で有意となった。従って、日本に長く滞在するほどより無標可能表現を多く使うことが明らかになった。

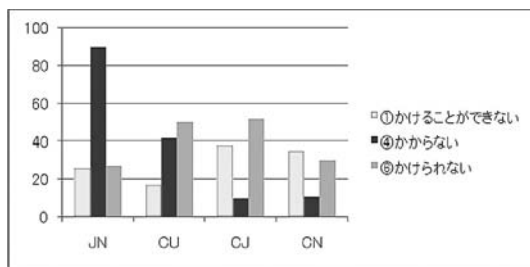
## 六. 三つの可能表現形式の選択傾向

今回の調査に使う六つの選択肢が第三節の i、ii、iiiに応じて三つに分類され、日本語母語話者と学習者の使用傾向を調査し、各表現形式の使用状況を possible 的意味的タイプごとに分析する。本稿はいくつかの問題を取り上げて対比する（全質問は資料1を参考）。

### A. 属性可能

本調査における三つの属性可能文のうちに、設問1は自然界の物の変化についての文であるのに対し、設問10「車のエンジンは寒いところで\_\_\_\_\_」の主題である「エンジン」が人間によって作られ、その性質を表すために人間の動作が関わることが多い。そのため、同じ属性可能文であっても、人間の動作性がより強いと考えられる。

図2 設問10



この場合、中国語では他動詞がより好まれる。上図で示されているように、学習者

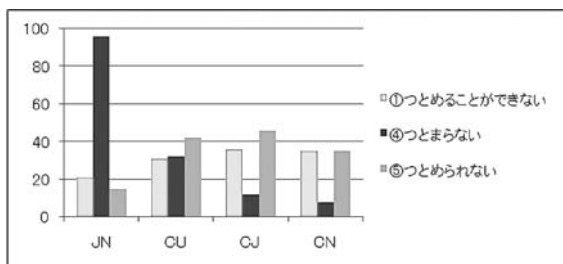


グループのうち、自動詞による無標可能表現の選択率が低く、「(ラ) レル形」を選ぶ人が多いことが分かる。また、CUグループはCJ、CNより自動詞の選択率が多かった一方、「コトガデキル」より「(ラ) レル形」を選ぶ人が多い。この点に関して、母語話者と違う。よって、CUが母語の中国語から影響される一方、日本語からも大きな影響を受けている。従って属性可能に関して、対象が人間によって作られた道具の時、状態変化を引き起こす動作がより顕著であり、他動詞が好まれる。それに動作性の高い「(ラ) レル形」を使う学習者が多く、自動詞による無標可能表現が一番使いにくいと考える。

### B. 能力可能

能力可能文である設問7「この役はあの新人俳優には\_\_\_\_」の主体が「新人俳優」であり、その能力が主体の動作の成否を意味する。学習者のうちに他動詞を使う人が多く、動作性の高い表現「(ラ) レル形」を選択する人が比較的に多い。また、CUは無標可能表現を選ぶ人が一番多い。注目すべき点は母語話者との選択の差である。「役を演じる」より、人間自身の状態のみに着目する考え方は学習者にとって理解しにくい。母語話者の中で自動詞を選ぶ人の数が他動詞より遥かに多い。それに対してCJとCNグループは他動詞をより好んでいることが図から分かる。

図3 設問7



### C. 結果可能

設問18「彼のくれた指輪、家中を探してもなかなか\_\_\_\_。」が設問3「この窓、なかなか\_\_\_\_ね。多分錆びてるかもしれないよね。」と意味構造上異なる。設問18の動詞部の中国語訳は「找不到」であり、結果補語「到」による状態結果を表している。設問3のは同じく「打不開」であり、中に結果補語「開」が単独でも自他兼類動詞として成り立つ。例えば：「開窗（窓を開く）」（他動詞）があり、それに対して「門開了（ドアが開いた）」（自動詞）などが挙げられる。他動詞として使う時はより動作性が強調される。しかし、「找不到」の「到」が多くの場合自動詞として使い、動作性より状態が強調される。従って、「找不到」では状態性がより顕著であり、その影響で中国

人学習者が「(ラ) レル形」ではなく、無標可能表現をより多く選択すると考える。

図4 設問3

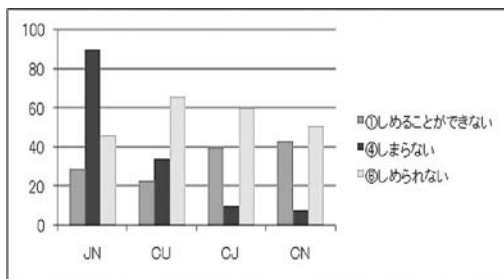
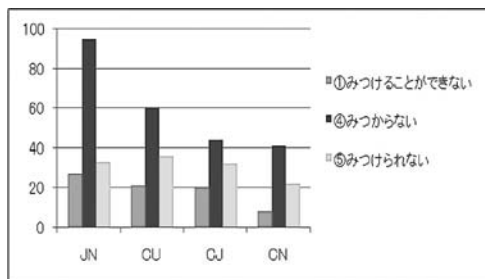


図5 設問18



#### D. 条件可能

設問4「ちゃんと病院に行かないと、あなたの病気\_\_\_よ」では、動作「病院に行く」の結果が「元気になる」ことである一方、中国語では外からの力である「病気を治す」という意味も含まれている。人間の動作も文の意味背景にある。先行研究で動作性の強い文では「コトガデキル」より「(ラ) レル」系がもっと好まれると指摘されている。三つの学習者グループの選択傾向が「(ラ) レル」系に偏り、「体が元気になる」という意味より、「誰かが治療を施す」の方が強いである。また、日本語と同じく「病気が治る」として解釈できるため、自動詞による無標可能表現を選択する人も多数いる。この文ではあまり動作性を感じない「コトガデキル」を選ぶ人は最も少なかった。それに対して、設問19の主題が「人」であり、結果の実現が人と直接関係する。この点について、他の設問とは異なる。他の文では動作主と対象が違うことであるため、自動詞と他動詞の選択上違いが生じてくる。設問19「両方とも可愛くて、どれを買うかはなかなか\_\_\_」では動作結果の実現が動作主である「人」の「考え」と直接関係があり、人間自身の動作で左右される。そのため、人間の動作が実現可能性の中心になっている。図7で示しているように、「(ラ) レル形」による可能表現を選ぶ人が最も多く、三つの可能表現形式のうちに「(ラ) レル形」は最も動作性がつよいと考えられる。

図6 設問4

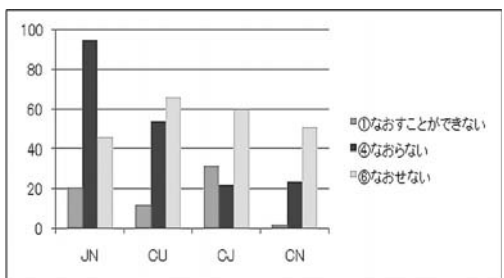
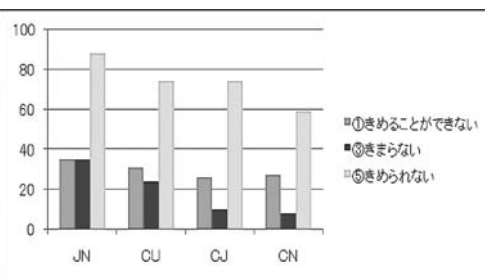


図7 設問19



「コトガデキル」、「(ラ) レル形」、「無標識可能表現」の使用傾向を分析した結果、母語話者と学習者の使用傾向に差があり、学習者グループのうちCUグループの使用傾向が一番母語話者に類似し無標可能表現を他の学習者グループより多く使用していることが明らかになった。また、三つの可能表現形式の使用に関して、四つの可能的意味的タイプより文の意味での動作性の有無と関係がある。結果の状態が強調される時にJN及びCUグループは無標可能表現を一番多く選択し、CJ及びCNグループは他の可能表現を選択する。動作性が高い時に四つのグループ共に「(ラ) レル形」を多く選択する傾向がある。

同じく動作性の強い文に関して、中国語で結果補語が他動詞として単独に使い、動作を表す時にCN及びCJグループは「(ラ) レル形」を多く使用する。結果補語が自動詞で、動作の状態を表す時に学習者が無標可能表現を多く使用する傾向がある。

三つの可能表現形式の使用傾向においては、学習者が母語の中国語から強い影響を受けていることが明らかになった。また、長年日本に滞在している学習者の使用が日本語母語話者に類似している一方、まだ差が存在することが分かった。筆者が長年日本に住んでいる中国人数人に聞いたところ、来日年数が長くなるに従って普段日本語を使うチャンスが多くなるようである。来日して何年も経ったCUグループの多くに日本人の友達が複数いるため、日本人と接触する機会がより多いのである。しかし、その反面日本にいる時間が長いほど、母語である中国語が衰退してしまうという悩みもある。その点に関して、調査結果に与える影響も考慮に入れるべきだと考える。

## 七. 調査全体における考察

日中両言語における可能表現はそれぞれに形式が多く、お互いの区別が難しい。また、日中両言語の可能表現形式には相互に対応しない表現が多いため、学習者にとって大変悩ましい文法項目であると言われている。本論はアンケートを通じて中国人日本語学習者の可能表現形式における使用状況を調査し、日本語母語話者と比較することによって考察した。その結果中国人学習者が無標可能表現を使用する際に日本語母語話者と大きな差があることが明らかになった。

(1) 人間が関与していない文に関して、中国人学習者も無標可能表現をより多く選択する傾向がある一方、使用率が母語話者と比べてまだ少ないことが明らかになった。また、人間の動作が関与している文に関して、学習者が無標可能表現より「(ラ) レル形」、「コトガデキル」による表現を好んでいる。また、動作性の高い文に関して、母語話者も学習者も「(ラ) レル形」を多く使う傾向がある。動作性の低い文は状態性

がより強調され、母語話者が無標可能表現を使うのに対して、学習者が「コトガデキル」を多用する。

(2) 多くの先行研究で取り上げられてきた可能の意味的タイプには「属性可能」「能力可能」「条件可能」「結果可能」などがあり、結果可能文は日中両言語の表現がまったく違い、他の三つに関しては日中両言語重なっている部分もある。しかし、今回の調査結果から、四つの意味的タイプより人間の介入や動作性の有無が学習者の使用傾向に影響するという結果が得られた。

(3) 中国語の可能補語による表現で、結果補語の動詞が他動詞の時に日本語の可能表現文を産出する時、中国人学習者が無標可能表現以外の形式を使用する傾向があり、結果補語の動詞が自動詞の時、無標可能表現を使う傾向がある。

日本語教科書では可能表現を教える際に、各表現を単独で取り上げて教えるのが普通である。筆者が辞書や事典を調べたところ「可能」や「可能表現」に関する解釈に自動詞による無標可能表現と関わる内容が見当たらなかった。また、学習者が使用する教科書も調べたが、自動詞による無標可能表現を紹介している教科書は少なく、学習者がこのような表現の存在すら知らない場合が多い。そのため、可能表現を使用する際に、日本語らしくない表現の産出が多くなってしまう。国語や日本語教育に関する辞書でさえ扱ってない無標可能表現が日本語教科書に取り入れないのはある程度理解できる。しかし日本語を教える立場から言えば、実際に日本人が使用しているため、無標可能表現や各可能表現形式間の区別を学習者に提示する必要があると考える。

日本語母語話者が無標可能表現を使用する場合、学習者がその自動詞の可能形や自動詞と「コトガデキル」の併用など、「二重可能表現」の産出が今回の調査で多数存在することが分かった。この問題を解決するために、教育現場で単独に可能表現の形式を教えるだけでなく、お互いの相違や無標可能表現などのような特別の使い方の存在を教える必要があると考える。

今回の調査に使用した20問は「A. 属性可能、B. 能力可能、C. 結果可能、D. 条件可能」という四つの可能の意味的タイプに分けることができるが、それぞれの意味的タイプに属する設問数が違うため、調査結果に影響が出た可能性があると考えられる。今後は設問内容を再検討しながら日本語教育の現場における指導過程についての調査が求められる。

## 参考文献

金子尚一(1986)「日本語可能表現<現代語>標準語のばあい」『国文学解釈と鑑賞』

51(1) 至文堂

- 渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 張 威(1998)『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から—』くろしお出版
- 張 麟声(2001)『日本語教育のための誤用分析——中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク
- 長友文子(1997a)「可能形の規則による動詞の分類—日本語教育から見た可能表現の研究(一)」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第47集 PP. 1-8
- (1997b)「可能形における自動詞と他動詞—日本語教育から見た可能表現の研究(二)」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第47集 PP. 9-16
- 森田良行(1979)「基礎日本語——意味と使い方」『国語学研究』118 PP. 89-91
- 姚 艷玲(2006)「有対自動詞による無標可能文の成立条件—<可能>の意味合成のメカニズム—」『日本語教育』128号 PP. 90-99
- (2008)「<不可能>の言語化に関する日中両語の対照研究」『日本語と中国語の可能表現』白帝社 PP. 88-109
- 呂 雷寧(2007)「可能という観点から見た日本語の無意志自動詞」『言葉と文化(8)』PP. 187-200

参考辞典

- 『国語学大辞典』東京堂出版 1992 第7版(1980初版)
- 『新版日本語教育事典』大修館書店 2005 初版
- 『日本文法大辞典』明治書院 1986 第7版(1972初版)
- 『日本語学キーワード事典』朝倉書店 2001 第3版(1996初版)

資料1 「アンケートにおける日本語母語話者が誤用と見なす項目」

本研究に使用するアンケートの全20問および母語話者が選らばかかった項目である。

1. 水と油はよく\_\_\_\_(まぜられない/まざれない)。
2. 一般的に男性は女性のような高い声は\_\_\_\_(でることができない/でられない)。
3. この窓、なかなか\_\_\_\_ね。多分錆びてるかもしれないよね(しめることができない/しめない/しまれない)。
4. ちゃんと病院に行かないと、あなたの病気\_\_\_\_よ(なおることができない/なおさない/なおれない)。

5. この会社では社員に発言や提案の自由がなく、下の声はなかなか社長の耳に\_\_\_\_  
(とどけない／とどけない)。
6. 今度の同窓会なかなか人は\_\_\_\_ね仕事でみんな忙しいからね。(あつめない)。
7. この役はあの新人俳優には\_\_\_\_ (つとまることができない／つとめない／つとまれない)。
8. 筋肉痛で腕はなかなか\_\_\_\_ (あがることができない／あげない／あがれない)。
9. ブレーキをかけても車は\_\_\_\_ (とめない)。
10. 車のエンジンは寒いところで\_\_\_\_ (かかることができない／かけない／かかれない)
11. 30分も経ったけど、タクシー、なかなか\_\_\_\_から、焦り始めた (つかまらない／つかまれない／つかめない)。
12. 朝から何も食べていないので、力少しも\_\_\_\_よ (ださない／でられない)
13. 昨日寝てないので、授業中眠くて目はなかなか\_\_\_\_ (あくことができない／あけない／あけない)。
14. このパソコンたぶん壊れているかもしれない。スイッチを何回押しても、なかなか\_\_\_\_のよ (つくことができない／つけない／つけない)。
15. 渋滞で車がぜんぜん\_\_\_\_ (すすめることができない／すすめられない)。
16. この棒は細すぎて\_\_\_\_ (たてない)。
17. <医者の話> 奇跡でも起こらない限り、この重傷者はもう\_\_\_\_ (たすけない／たすかれない)。
18. 彼のくれた指輪、家中を探してもなかなか\_\_\_\_。(みつかることができない／みつけない／みつかれない)
19. 両方とも可愛くて、どれを買うかはなかなか\_\_\_\_ (きまることができない／きめない／きまれない)
20. 一生懸命勉強しないと一流大学を受験しても\_\_\_\_よ (うけることができない／うけない／うけられない)

#### 付記

小稿は平成23年度首都大学東京大学院 人文科学研究科日本語教育学教室に提出した修士論文を元にしてしています。ご指導をくださいました西郡仁朗先生、浅川哲也先生に御礼を申し上げます。

(おう いい・首都大学東京大学院博士後期課程)